

池田清彦著 『構造主義科学論の冒険』

保田 道雄

一時期思想の低迷が叫ばれ、最早哲学・思想は大衆はおろか、読書人・知識人・学生らの間にも見放され、ただ残るはコアラ化したアカデミズムのみと揶揄されたものである。さらに山脇直司氏が『進化論の基盤を問う（R・シュペマン、R・レーヴ著 山脇他訳東海大学出版会）』の解説で言うように「一方で単なる文献学や純粹思弁に偏した哲学、他方で哲学的問いかけを喪失した自然科学が奇妙に併存する、わが国の不幸な学問状況」（三〇四頁）が言われるのもしばしばである。

第一の揶揄を現在の状況に即して言えば、思想アカデミズムの世代交代とポスト構造主義以降の非アカデミズムの隆盛によって思想哲学界はある意味で活況を呈しており、特に科学哲学の場合人工知能研究やいわゆるバイオ・テクノロジー等の最新科学との交流も活発で、この批判がある程度打破されたことは明らかである。さりながら第二の揶揄は残念ながら今なお完全には克服されたとはいえない。その原因は何ゆえであらうか。ひとつは（日本）学会が強度のギルド意識に支えられていることが挙げられ

るが、このような風潮も少しずつではあるが雪解けに向かっていると見えよう。しかしながら哲学と自然科学の場合、より根源的には同じ西洋の知の体系でありながら、それらの日本に移入されるあり方が、たとえば天下りの学問と、もっぱら実際の応用技術というような形での別口であったために、その精神的同根性が強く意識されないという事情があるのではなからうか。

科学哲学界を見渡しても、哲学出身者と自然科学出身者とは明らかにその気質に違いがあることが認められる。その違いを越えてどうすれば真の科学哲学が可能か。現代の科学にまつわる危機意識と問題提起は万人が共有するものであるが、その反面科学の先端理論が極めて高度に専門的であり、一介の素人が安易に近寄り難いという事実は厳然として存在している。しからば、その可能性は科学の文脈のうえで哲学を語り得る科学者に求められると推察できるのではなからうか。

本書の著者池田清彦氏は、まさにその方策が期待できる気鋭の構造主義生物学者と言えよう。この書物は高度な思想の大衆化と、

九〇年代日本の思想文化のベースづくりに貢献する、とのキャッチ・フレーズとともに売り出された〈知における冒険〉シリーズの一冊である。構造主義生物学とは、発生や進化の現象の背後の構造を探知しようとするもので日本では池田氏と柴谷篤弘氏が唱えるものであるというが、本書においてはそれを一歩進めて構造主義科学論Ⅱ池田哲学を提唱するのである。本書で展開される趣旨は何か。その一つは外部世界の实在性(唯物論)の仮定を否定しても科学理論は立派に成立するということであり、もう一つは多元主義社会を目指そうというものである。

それらをさらに端的に言えば、科学は真理ではなく同一性の追求を目指しているということ、人々の恣意性の権利を最大限に尊重する社会を創出しようとすることを標榜することである。本書は全部で六章に分かたれているが、第一章では、素朴な科学論が提起する所謂「真理性」・「客観性」への疑念を哲学者と科学者の対話という形で鋭くえぐりだし、科学とは名称間の関係記述であるという視点をうちだす。さらに古典的な科学論としての帰納主義、経験主義、検証理論、ポパーの反証主義、ウィトゲンシュタインの写像理論、ハンソンの「事実の理論負荷性」の概念による規約主義と共約不可能性論、クーンのパラダイム論、規約主義のアポリアをめぐる様々な論理の展開を順を追って紹介している。

ここまではいわゆるオーストドックスな分析哲学系の科学論の紹介とも言えるが、第二章においては科学の記述形式、現象と記述への考察を行ない、そこにおいて構造主義のルーツであるソシュ

ール言語学の思考を巧みに交又させる。そしてシニフィエⅡ「コトバが示す「同一性としての何か」と、シニエスなわちコトバの「文節の恣意性」の指摘から、外部世界の实在性への考察へと論を向けるのである。外部世界と实在論をめぐる西洋哲学の歴史的展開がデカルト・カント・ヘーゲル・フッサールをめぐってさらに行なわれ、独我論、他者、共通理解可能性の論点が明示される。ここでは特にソシュールのシニフィエが、カントにおける物自体(不変の同一性)という視点で読み込まれる。共通理解可能性を支えるものとしての物自体が、感性を通じた物自体の認識枠組の共通性という見方として浮上してくるのを受け、共通理解ということを私と他者に同じ現象が現われることとカントが解したことを指摘する。それに対しフッサールは、カントを一歩進めて、共通理解が可能であるための現象の共通性とシニフィエの共通性という観点を乗り越え、共通理解を現象がコトバに翻訳される時の同型性と解したとしている。

さらにフッサールを受けて共通理解の問題を徹底して考え抜いた思想家として後期のウィトゲンシュタインを登場させる。ここでは科学論で言う「規約主義」の正当性を裏づけるとも言える彼の言語ゲーム論を基に、その規約を、自然言語を基礎的規則としてもつ現象から何らかの同一性への変換規則、と考える。そして、この規則の同型性を通して獲得した何らかの同一性が、すべての人々にとって共通であるという確信を、くり返し相互に確認しあうゲームが科学であると規定するのである。

それでは科学の持つ共通理解可能性・根源的意味での「客観性」の保証は何によって為されるのか。構造主義以前の伝統的哲学においては、それは「実在」によって為されたが、池田氏の立場においては、記号と記号の関係形式の記号にシニフィエを代入した、複数の現象をコードするコトバとコトバの関係形式たる「構造」がそれを保証するものだと言う。

すなわち「科学とはこのような構造によって現象をコード化する試み」(九一頁)である。さらに非明示的な形式を含まない客観的な形式だけを含む構造だけによって記述される「蔽密科学」と、理論構造に含まれているコトバをどうしても非明示的な形式を含まないコトバに変換できない「非蔽密科学」の区別がなされる。

結局のところ科学というのは構造を記述することであり、科学理論とは構造のことであると結論される(構造主義科学論の樹立)。

第三章第四章第五章では、構造主義科学論の文脈に沿って、ギリシア以来の哲学と科学の読み直しが行なわれる。同一性の着想はギリシア以来の哲学と科学に常にまわりついていたが、同一性が現象あるいは外部世界に内在するという構図は序々に崩壊し、関係性・形相の追求に収束していくことが見て取れるのである。

さらに、関係性の生物学としての遺伝学と進化論、蔽密科学としての生物学たる生化学と分子生物学の展開も興味深いものであるが、生命現象の本質をコード化する試みは蔽密科学では為され得

ないと言う(蔽密科学としての生物学は物理・化学現象をコード化しているに過ぎない)。

ここにおいて感心させられるのは、著者が実に見事に西洋哲学のテキストを読み込んでおり、それによる科学解釈も解釈を感じさせないほど自然であることである。

特に「絶対時間や絶対空間や物体が、外部世界の中に不変の同一性を保つ実在として存在することを認めなかった」(一三九頁)点で意義を確認するマッハ哲学、アインシュタインの相対性理論の関係形式・形相・対称性を受け継ぐ大統一理論Ⅱ超弦理論の評価は極めてスリリングである。

第六章では科学と社会についてが語られる。以上に述べた構造主義科学論とそれによる社会の構造的分析の総合から科学理論の真理性は放棄され、その制度性、さらに社会に深く根をおろした制度性が論じられる。科学理論の真理性というドグマは科学教という信仰となり、個人の恣意性の権利の剝奪を正当化するための手段へと横暴化する。池田氏は現象の実在性に對置して科学理論の相対性を力説し、「恣意性の権利は科学理論の正当性に優先する」(二一四頁)という原則を高らかに宣言する(現象学的着想を高く評価している)。現代資本主義社会は高度な自律的システムであり、科学はその経済効率第一主義に付随する社会システムの一部と化している。科学は自らが産み出した新情報が次の研究課題を決定するという擬自律性を持つ。科学に金が注ぎ込まれている間は内容の信憑性とは無関係に破綻をまぬがれるという病理

を持つ（これに社会生物学が当てはまると言う）。

民主主義の基本である自由・平等・機会均等・個人主義は、すなわち恣意性の権利に属するものであるが、恣意性の権利は相互的なものであり、他者の恣意性もまた尊重されねばならない。これは根本的に心理的な差別構造と対決するものである。差別構造を表面的に解決するための伝統的やり方として、文化一元論によって他者ならびに他者集団を排除する場合があるが、日本ではこれが実質的には経済効率第一主義であり、その政策が画一的な文教政策を生んでいる。しかし経済効率第一主義という自文化中心主義はいつか破綻を招くであろう。ここで多元主義社会が提唱される。すべての人に恣意性の権利を与え、かつ人類が滅亡しないためには、多元主義的な社会の創出が不可避であると言う。多元主義は様々な文化や伝統や生き方自体を擁護するのではなく、それらを擁護する個人の恣意的な権利を擁護する。擁護すべきものは、世界中の人々の意識の中に存在している相互に共通であったり背反したりしている多元的な心的構造の実在性である。多元主義社会こそは、世界の人々が破滅を回避して、共存を可能にする、恐らく唯一の最終社会形態であると言う。そして構造主義科学論は多元主義と強い親和性を持つのである。

池田氏は多元主義社会の実現には悲観的であり、人類は悪性のガンのように全地球を冒して滅亡すると語っている。その予測の是非はともかくとして、最後に科学的実在論者である評者の感想を述べれば、著者は科学的認識が間主観的な共通理解において成

立すると論じてはいるが、それでは科学的探究の動機が間主観的な共通理解に参加しようという社会的欲求に求められはしないか、共通理解への参加が果たして根本的に疑念を解消する行為となるのか、という点が挙げられよう。

いづれにせよ、著者が偽りなく膨大な西洋哲学と科学の文献を読みこなして、科学と哲学の同根性を明らかにし、さらにその社会ないし異文化の中にしめるあり方を浮き彫りにしているのは賞せられる。

なお、本書は著者の前二著『構造主義生物学とは何か』（海鳴社、一九八八年）、『構造主義と進化論』（海鳴社、一九八九年）のいわばダイジェスト版であるので、こちらも参照することをおすすめしたい。

（毎日新聞社 四六版 一三〇〇円）